

木下夕爾の文学とその背景(8) : 表現と含羞

岡田, 秀子

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部紀要

(巻 / Volume)

107

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

1998-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004802>

木下夕爾の文学とその背景（8）

— 表現と含羞 —

岡田 秀子

私が藥局の客としてではなく、木下夕爾を訪ね、あの「ランプのある部屋」で直接お話を伺ったのは昭和二四年と昭和二七年の二度であった。いづれの時も、都夫人の縁続きで高校、大学とも一年先輩だった梅田昌志氏と一緒にであった。二四年は、たしか学制改革で普通科が新設された神辺高校に梅田氏をリーダーとする文芸部を設立。そのための諸の助言を得るためだったが、つぎの、二七年は中央で評価を得ている詩人に接したいという強い気持ちからだ。どういふ話の中で私が言い出したのか記憶にないが、その時、東京大学に在学していた一年上のYと恋をしていることを告げた時の夕爾の反応であった。当時の私は、伊藤整訳の『チャタレー夫人の恋人』をわからなのまま読み、太宰治の文学にも少なからぬ興味をもっていて、恋愛や革命を語るのが文学者だと思っていた。しかしその時の夕爾は、目を伏せ、湯呑に手を觸れたまま、「御両親は賛成ですか？」とぼつりと言われた。意外だったためか、やさしい声と沈黙が四五年を経た今も心に残っている。男女の交際を不良のすることと見るのは、当時では常識であった。しかし、夕爾のこととは違って深いところから発せられた「表現」だった。夕爾に、「枯蔓のつかみそこねし物の距離」といふ句がある。『木下夕爾全句集』の最後のページに置かれた二句のうち一つで、今一つは、「枯れいそぐものに月かくほそりけり」だが「枯蔓の…」句は、あの時のあの深く、するどく澄んだ夕爾の眼と、生きるべく觸手をのばす蔓に過ぎなかった自分を想起さす。

冬枯れの季節にふと目にした蔓が、なにかをつかもうとしたまま朽ちている。夏の日の盛んなときに、蔓は縦横無尽に近くの「物」をらせん状に巻いて、その植物的な意志を露わにする。

藤蔓や蔦葛の類は、切ってもすぐ生えてくる。そこに激しい生命の意志を読み取るのがふつうだが、木下夕爾は、あたかも蔓の剥製化された姿と、その残余の目に見えない動きを一瞬のうちに捉えた。物に絡むしかない蔓の積極的な本性ではなく、かえって「つかみそこねし物の距離」を感じたことがこの特異な詩人のすべてを物語っている。

『近代日本語表出論』

この句に目をとめ、「へつかみそこねし物の距離」を感じたことがこの特異な詩人のすべてを物語っている」とまで言いきった樋口覚は代表作に以下の句がある、として「家々や菜の花いろの燈をともし」「木を変へし蟬のこころにふれにけり」の二つをあげ、

掲出句は「遠雷」以降のもので、人生の不如意もあって一生を田舎住いで薬局店を営んだ人の、ある断念の思いが表出されている。句風はアルチザン風の知的構成力に富み、繊細な近代意識で的確に備後の自然を描くところに特徴がある。その人生と同じく、寡黙で恥ずかしがり屋の一面をもつが、とくに自然と人口の間にある境界や臨界点を挟んで、そこに醸しだされる動的な「距離」を描いた句に非凡なものをみる。

つまり、動詞の使い方が特異で、主語が何であれ、それによって今まで気付かなかった自他の動的な「距離」を発見するように読者は促される。

『近代日本語表出論』

この文章について樋口があげている句は、「堰を越す水ひそかなり曼珠沙華」「春昼を来て木棚に堰かれたり」「牧柵を越えてあまたの秋の蝶」「噴水の涸れし高さを眼にゑがく」である。常套的な俳句の解説ではあるが、「つかみ

そこねし物の距離」を感じたことがこの特異な（傍点筆者）詩人のすべてを物語っている。とするとところが言いきれない。たいていは眼前にあっても、句にしない（剝製化された）枯蔓の姿とその残余の日に見えない動きを一時のうちに捉えた感覚を樋口は特異な（傍点筆者）感覚をもつ詩人とみたとしたら、それは誤りだ。その人生と同じく、寡黙で恥ずかしがり屋の一面をもつというのも、その誤りを裏づける言語表現だ。言葉が映す人生というものがたしかにあるが、たんなる「寡黙で恥ずかしがり屋の一面」という性へきではなく「含羞の人」としての夕爾を見つめないかぎり、句にする作者の内的動きはかすかに感じられはしても、腑に落ちる言語として示せない。

鈴木真砂女は、平成八年秋、新田恭隆氏の紹介で「卯波」をお訪ねした私に「男の含羞はいいものです。夕爾は波郷と似ていた。」と言われた。樋口覚の夕爾評のように（樹を変へた蟬のころ）と（人生の不如意もあつて一生を田舎住いゝしたことをつなげてへある断念の思いが表出されている）と読まれると、（断念）ということばも軽いものにならないだろうか。軽いものに対して、俳句がもつ表現における「軽み」は必要でない。人生態度としての「断念」とは生涯にわたり精神に内圧をかけて、人知れず断念以前の情熱を持続さすものである。夕爾はたしかに枯蔓のように人生の早い時期、自らの才能を開花さす場所からひき返さざるを得なかった。物をつかみそこねた枯蔓は、「不条理な運命の上に躍らされる生というものがあることを夕爾に認識させた。つかみそこねた枯蔓は、その形象化されたものでもあるのだ。それは「存在の不合理という命題を感性的な言葉に表現」（鈴木貞美）した梶井基次郎につながっていく感受性へと夕爾を導いた。夕爾には、「生涯に一つの秘密のレモンの黄」の句がある。自らの文学の鍵のありかを暗示する句だ。

句を求めて、夕爾はひとりよく歩いた。その歩行に魔法の杖つえよろしくふところにしるばせたのもレモンである。前掲の句と「冴ゆる夜のレモンをひとつふところ」にこの二つの句はいづれも、昭和二四年以後の句で「生涯の……」の句は「春雷その他」に「冴ゆる夜の……」句は昭和三四年から四〇年の句を集めた「遠雷以後」に載っている。

夕爾にとってレモンは梶井基次郎の作品集巻頭の「檸檬」の中の舶来の果物であり、同時に作品「檸檬」に象徴される梶井基次郎の生き方と表現へのなみなみならぬ関心の象徴であるが、このことは項を改めて書くことにして、

ここでは夕爾の表現にもあてはめられる鈴木貞美の梶井基次郎についての文章をあげておく。

梶井基次郎は自分が実社会から隔てられているという実感をもち、その疎隔感からの回復と救済を、精神が生気を帯びる一瞬、魂が外界の事物に転位し、一体化する気分などに求め、その魂の経験を言葉によって再現することに自身の生の存在証明を求めた。その模索は、大正期の日本において、ほとんど同じような方法を示す「自然主義」と象徴主義の理論とその表現の流れを汲みながら、近代的な社会、人格と人格の間における自我の紛糾を書く小説の形態を完全に脱した新しい言葉のあり方を模索する手探りだった。それは『ある心の風景』においては「へ視ること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分或は全部がそれに乗り移ることなのだ」という認識の提示となり、対象の描写がそのまま自分の想念の表現ともなるような文章の工夫は、たとえば、『冬の日』の冒頭の比喩を過剰なほどに用いた文体となって現れたり、たとえば『冬の蠅』では、蠅の観察的な描写がそのまま自分という人間の在り方を象徴する文章となっていた。それはさらに桜の樹皮の奥に生命の流れを透視し、あるいは湯ヶ島の闇の風景を想念の中で、しかし感覚のリアリティとともに展開し、また、南宋画のような東洋的な象徴の世界の中に、河鹿の可憐な求愛の姿態を描き出すなど、対象と想念を自在に溶けあわせ、戯れるような自在な境地に達していた。井上良雄はそれらのうちに主客の分裂を超える、近代の世界観を超える方向を読みとったのだ。

『梶井基次郎 表現する魂』

梶井基次郎は一九〇一年（明治三四年）生れで木下夕爾が第一早稻田高等学院（仏文）に入学した昭和七年四月の一ヶ月前、肺結核のため逝去している。享年三一歳で、夕爾十八歳の春である。履歴を概略すると、梶井は大正八年、三高理科に入学。この頃より胸を病むが、京都に下宿、教養主義の渦の中で芸術にひかれ、二回落第。大正一三年には東京帝大文学部英文科に入学し、東京の下宿を転々としながら翌大正一四年には三高時代の友人、中谷

孝雄、外村茂(繁)らと同人雑誌「青空」を創刊している。「檸檬」「城のある町にて」「ある心の風景」はその年書かされている。北川冬彦、三好達治らとも交友があり、病いが悪化したため伊豆・湯ヶ島温泉に転地した先では、川端康成、宇野千代、尾崎士郎、萩原朔太郎らとも交流している。結核という不治の病によって疎外されているとはいえ、梶井のおかれた場所は、東京、名古屋の時代の外は、生涯、片田舎で生きた夕爾とは大きく異なる。夕爾は文壇から孤絶していったといっても過言ではない。私はかつてこのことを、「夕爾が東京にとどまって詩を書くことを断念したのも、また田舎にあつて詩を書くことを断念しえないのも、人一倍虚弱で且つ繊細すぎる感受性を持つて生れた人間の存在条件の問題」として、考えた。夕爾を孤絶させる「こうした田舎を夕爾は恐れながら見つめ、見つめることによって心の棲み家を作った」のだと。その時萩原朔太郎「月に吠える」(大正六年)の中の詩の一篇(「わたしは田舎を恐れる」)にはじまり田舎の手触りはさらさらして気もちがわるい、／わたしはときどき田舎を思うと、／きめのあらい動物の皮膚のにほひに悩まされる」で終る詩)をひいて、朔太郎が「田舎の手触りはさらさらして気もちがわるい」と書くそれらを、夕爾は一つづつ触れ、愛し、詩にした。夕爾のエッセイや私信に朔太郎に敬意をもった文章を再三目にしたが、夕爾はその質を言えばよほど室生犀星に近いと考える」とも書いている。この度、山中玄造氏の文章「木下夕爾と学研」で、「昭和十五年に村野四郎と同時に夕爾が受賞した『文芸汎論』詩集賞の選者の一人に堀口大学がおり、強い推薦を得たことは想像に難くない。(ただ、同じ選考委員であつた激情の詩人萩原朔太郎が夕爾に一点も入れなかったことは、夕爾先生から直接聞いたことがある。)」に奇遇にも出会い、夕爾の対象への距離のとり方を改めて認識した。物を見る時の夕爾の感情の澄明さに心をうたれるのだ。いま、たまたま『含羞の詩人木下夕爾』(追悼記念誌)をめくっていて、国下磨瑛人氏の「清楚毅然の人」の以下の個所を読んだばかりで、なおさらであつた。

某誌で夕爾先生を、Ⅱ単なる抒情詩人であつた木下夕爾は、戦後すでに没落していまだに浮び上ることができない。それは彼がリリシズムの世界に安住して、哲学的な基盤も明確な社会観も持たないためであ

る―云々IIの声に応えて、するどい筆先で「単なるリリシズムが見た眼にいかにも美しくそうして安手であるか、既に過去の人となった萩原朔太郎の、そのロマンチシズムや、リリシズムの詩が、ニイチエやショウベンハウエルの哲学に基盤をもち、その故に今も近代性を失はないことはよく人の知るところである」とつっぱね、今更なお痴戯な一文を草するか正してよく作品を見よ、といきどおりの返札をされています。先生の一見温和な人がらのうらにかくされた、内在する背骨の強さと激しいパッションを今更乍らまのあたりに見る思いがしたものです。

『含羞の詩人・木下夕爾』

追悼記念誌「含羞の詩人・木下夕爾」を繰り返し読んで気づくのは、含羞の人という共通項でくればするが、そこには多面的な夕爾像があり、まるで詩に對する時と同じく、詩人・夕爾がへわかつていないものにはわからないし、わかる人には一瞬にして通じあえることを改めて感じさせられた。なかで、目の醒める思いがするのは数少い詩友の前で夕爾が見せた精神の高さであり、志を沈めた激しい情熱である。夕爾はこれを私淑する近代詩人・萩原朔太郎から青春のかたみとして受けついだのではないか。ここにも含羞の人としての夕爾が伺える。前項で歌人・宮修二の「表現の含羞」の中心部分を引いた。ここで再度、その部分の含羞の人の心のメカニズムをみるために要約する。〈抒情詩は普遍化され、一般化された概念を描き出すのではなく、その作者に特有な情緒、思念、感情をうたふもので、それはつねに真新しいものでこそ共感を呼ぶ。真鮮しいもの汚れないものは常に自ら傷つきやすく、そのことが予感されている。客観の場の批評の中に勇気をもって出ようとすると心を一方に持ちながら、一方ではそれが自らの抒情詩であり、真に自らの表現であるかの確証を保留する傷つきやすい心が不安と羞いである。勇気は度重なれば常に汚れ堕ちてゆくものだが、堕ちてゆく勇気を支へ、洗い、つねに新しい勇気とさせるものも、この不安と羞いの感情である〉と

一般には、「好奇心と謙虚さ」と云われる他人へ向う好ましい心の態度は内圧がない言葉で、それはすぐれた抒情

を生み出さないのでないか。詩人・大岡信は、このことを夕爾の句、「花冷の庖丁獸脂もて爨る」について、はからずも語っている。

要するにこの俳人は、季語をはじめとして、句の中で用いる日本語の「質感」についての一瞬の計量が、きわめて正確にできたのだということである。これができるかできないかが、凡庸な俳人としからざる俳人との違いの究極にひそむ秘密なのだが、このことがわかっている俳人は初めからわかっているのだし、一方、わかっていない俳人は、わからないがゆえにいつも樂天的でさえあり、傷つきもしないでいられる。「繭の中もつめたき秋の夜あらむ」には、質も量もともによい春蚕の繭とは異なった、ややうらさびしい秋繭の質感が、「繭の中」の「つめたき秋の夜」という、架空の、しかし歴然たる現実でもある一つの「夜」をよび出すことによって、もののみごとにとらえられている。

こういう微妙な感覚を触知できる能力は、結局のところある種の想像力の中にあると言うしかないだろうが。それとて通常に人が持ちうる想像力以外の、何かしら異常な想像力といったものでは決してないものである。ほんの少しの、何というべきか、しんと静まり返った一瞬の余裕、とでもいえるものを、想像力の中に持ちうるかどうか、俳句創作においては、天と地を分けてしまうものではないだろうか。

「机の下に棲む風」「木下夕爾」

つまり、微妙な感覚を触知できる能力があつてはじめて、物をつかみそこねた枯蔓の悲しい滑稽さを俳句にできたとはいえる。しかもこの句は、もうこれ以上何も云うことがない。この句によつて読み手は目に写っていたにもかかわらず、見ていなかった姿がはじめて視えるのだ。一人の作者の生き方と不可分の書くという行為が読み手にまっすぐとどいて心は深いところでそれを受けとっている。夕爾の寡黙は内部を「独樂の澄み」のような状態にととのえようとしているためだろう。私には今も目をとじると他人の存在さえ気がつかずに、両手を着物の袖に入れ

てひたひたと田舎道を歩かれる木下夕爾の姿が浮ぶ。

さて、含羞に話をもどして、矢代静一が太宰治の心を深くよみとった文章を引く。太宰治は夕爾とともに「井伏鱒二の二人の弟子」（高田英之助）で、しかも夕爾と同じく、「含羞の人」として公認されており、『愛』について深く思索した作家である。夕爾自身も「僕は自己を救うために、フランシス・ジャムや或る時期のヴェルレヌの、いわば愛や、祈りの世界に到達したいと思っている。」と言っており、二人には共通する点が多い。好奇心の良質なものは愛に向い、謙虚の真の姿は祈りの中にこそあるが、このことはまた、誤解を生みやすい。誤解した一人が臼井吉見で臼井はその「太宰治論」で

彼ほど自分をいじめぬき、責めつづけた作家は多くない。だが彼は決して、自己否定者ではなかった。もっともおのれを自負した作家の一人とっていい。少くとも彼の自己否定は直ちに自己肯定と結びついたものだった。

と書くのだ。矢代静一は、これを受けて、

自己否定から自己肯定へ……あっさり読むとそれはそれで納得できてしまうのだが、やはりちよつと腑に堕ちない。私は自己肯定には、自己過信と倨傲の影をみるものである。そして太宰には、そのようなものは見当らない。私には太宰は絶え間なく自己否定を繰り返しながら、螺旋状の階段を登って行った人に見える。太宰の自己否定は自己に対する誠実と謙虚から来てい、それらは他人への心づくしとなって現われるのだ。ここに彼の自持があった。彼が自己肯定できないのは、むしろ作家としての自信のなさからではなく、むしろ逆で、自信につながるものであるが、それよりも生来の気質からきているのだろう。また臼井は「自己喪失者ではあっても」と述べているが、自己喪失者は、神を必要としない。自己肯定できぬは

にかみがあるからこそ、神は太宰の背後に忍び寄って来、彼の方も振り返って歩みよることを欲したのだ。

——中略——

太宰という人は、まとめて括てしまうと、愛と死、信仰と虚無、道化と真実の葛藤を、真摯にこつこつと刻み込んで行った天才と呼んでもよいくらいの、含羞の人であった。 『含羞の人私の太宰治』

ちなみに木下夕爾が井伏鱒二に実名木下優二で送った未発表短篇小説「日常茶飯事」には、アポリネールの「ミラボオ橋」を低唱していて、せめて終章まで待ってもらいたいの、主人公のもとにいつもの薇山老が来訪、太宰治情死事件に感服して、この事件を漢詩に仕立てたものを見せられる夕爾に似た詩人の感慨がエピソードとして書かれ、「故太宰氏に就ては、二三の作品を見たにとどまるが、尊敬に値する小説家だと思っている。世俗に敗北した気の毒な人だとも同情している。あの純粹の十分の一でもおれにあればなあと思うことしばしばである」との己を戯画化したつぶやきも記されている。鈴木貞美は、「梶井基次郎の作品の隅ずみに現れていたユーモアには風刺の色がなく、その点で夏目漱石のユーモアとはかなりちがう。むしろフランス風のユムール近い。」と言っているが、夕爾のそれも同様だ。夕爾の「日常茶飯事」を読むと、井伏鱒二になることも、太宰治になることもできない木下夕爾がかえってくつきりとし、夕爾を「詩をかくから詩人なのではなく、生れながらの詩人だ」と言いきった堀口大學の言葉がうなずける。

井伏を師と敬慕しながら、井伏の属している「四季」には仲間入りせず、井伏に先達として三好達治を紹介されながら、その師、萩原朔太郎を私淑。しかし生涯の秘密として、ひそかに範としたのは「檸檬」の作者であるといった夕爾は、たしかに、人に対しても〈微妙な感覚を熟知できる能力〉があったと言える。それは、詩人としての自らを清朗に生かすための深い弧心と不断の自己省察をもっていたことによる。夕爾はそうした視座から病弱な身と憂鬱なところに気を満ちさせるべく選んだ詩型が俳句とすれば、夕爾が残る時間を自由に楽しんだのが児童詩であろう。小林秀雄が梶井基次郎の「檸檬」に、〈童話の様な生き生きとした風味〉を感じてたように、夕爾の詩

にも句にも読者はそれを感じるはずだ。思い屈した時世俗を逃れて、心を開けるのは詩をつくる子どものいる場所であり、そこで子どもの詩心を開かせることであった。夕爾は、昭和二四年に詩誌「木靴」を創刊、これを主宰するかわら、三〇年には木靴発行所から「児童詩集」を刊行している。また社会に向ってNHK広島放送局より交響詩「広島」を放送するほか朝日新聞に「火の記憶」を発表と、時代のさし出すテーマにも立ち向って詩作（思索）している。以下、昭和三六年（四月）から死まで夕爾がかかわった児童詩の指導について、喜多紀世雄氏の回想に耳を傾けることにする。夕爾の詩人としての特質がよくわかるからだ。

私がかつて在任した府中市立河佐小学校で児童詩の研究を行っていた頃のことです。陽のあたらない谷間の児童達に少しでも明るい笑顔を掴ませることができると考えて、全校あげての児童詩とりくんだのです。

とりくんではみたものの幾度か厚い重い壁にぶつかり仲間の先生がたとえただ嘆息するばかりでした。こんな苦しい最中に指導助言の光明を与えてくださったのが詩人木下夕爾さんだったのです。

幸い夕爾さんとは中学時代の同窓生であり、当時の校友会誌掲載の詩についても論議していた間柄でもあったので、三十六年度から亡くなるまで児童の作品を素材として常に懇切な指導を受けることができたのであります。毎学期一度は来校して貰いました。

しかし、夕爾さんの最初の気持は、「児童詩は詩ではない。」と考えていたと後になって述べられたことがあります。それは児童達の年令では、文学の理解はないのだからという観点からであつたようです。これも指導の回数を重ねるうちに次第に消えていったようです。夕爾さんの子どもに対する認識はすっかり変つてしまつて、子どもの目のすばらしさに対して感激されたこともしばしばでした。無駄口の少い夕爾さんの批評と感想は実に適切で、すかつとした率直さと切れ味のよさは強く記憶に残っています。

たゆまない夕爾さんの指導のもとで、先生がたもみんな根気よく創作指導をつづけ、児童達の作品もす

ばらしいものへと生れ変わり向上していったことも顕著な事実です。

児童作品はやがて竹中郁さんの「きりん」に毎月掲載され、ラジオ・テレビ放送、全国入選、あるいは作曲家三善晃氏の目にとまり、作曲されてレコード化されたり合唱曲となったものも数曲、遂には海外放送という幸運に恵まれたのであります。日を追ってこんな結果が深まり重なる度に夕爾さんは、私に「子どもはすばらしいですね。」と語って心から喜んでおられた姿が今もはつきり浮んでくるのです。これだけの指導効果があったのにもかかわらず私どもの夕爾さんに報いたものは何らなく、ただただ慙愧に耐えな^{ざんき}いばかりです。当時指導していただいた児童達は、現在立派な青年として成長しておりますが、当時のこの忘れられない数々の作品と喜びは、今でもその印象が強烈に脳裏に焼き付けられているに違いありません。同校ではこの創作活動が廃校になるまで十年間もつづけられましたが、夕爾さんによる確固たる基礎固めが築かれていたればこそであります。

このようにいろいろ追想していけばいくほど突然、早く逝去されたことが残念でたまらなくなるのです。御自分の創作のみでなく、こうして児童詩の指導にも頗る熱心にあたられたことを知ることの少いことはまことに残念です。自分の創作と余暇を利用して他人の指導に特に若い世代に対して献身的に奉仕される詩人こそ、真の詩人であり、その温厚な人柄が今でもますます光りを増してゆくように思えてなりません。

河佐小学校の児童詩のみならず、永年つづいた芦品郡、府中市の教師の児童詩同好者の集る「灯の会」のよき名リーダーであったことも特筆されなければならぬことです。その会のテーマソングの名作「ともしびの歌」も無報酬で奉仕して貰ったものです。この会は夕爾さんにとって、児童詩に対する永遠の記念碑となることを信じております。

最後に、河佐小学校児童詩集「つりばし」によせられた序文の一部を披露してまとめたいと思いますが、この文そのものが、そのまま夕爾さんの詩そのものでもあるように思えてなりません。

「つりばし」の詩を読んで

木下夕爾

言葉はみじかいが、意味は深く大きいそれが詩です。

10で表現してあることが、読むほうには20にも30にも感じられる。

それが詩です。

波のさわぐ池や、川の水のおもてには木の影はうつらない。澄みきってあればいるだけ、影は、はっきりとうつることができる。

それが詩と詩を作ろうとする心とのかんけいです。

春もまだ浅い風の吹く日、空のふかいところで、ヒバリが鳴いている。立ちどまって、しずかにしていればきこえる。きこうと思つて耳をすますと、いよいよはつきりきこえる。

詩はそうにしてつかまえられる。

みなさんの詩をよんでこんなことを考えました。みなさんのよく物を見る目、よく聞きわかる耳、いきいきしたかざりけのない心を感じました。みな毎日のくらしをひろく、ゆたかに、美しくしてくれるものです。

「つりばし」の詩をかいた眼を、耳を、心をたいせつにしてください。

長く、長く、いつまでも。

『含羞の詩人・木下夕爾』

旧制中学で夕爾と同窓であり、校友会誌掲載の詩についても論議した間柄である喜多紀世雄氏の回想をきいてみると、夕爾の詩「春の鐘」が思い浮んでくる。定本木下夕爾詩集にもれておるので記しておく。

春の鐘

子供らよ鐘を撞け

やらわかに鐘を撞け

ゆく春の日は真昼

竹やぶを透く桃唄

子供らよやわらかに

鐘を撞け

この鐘の中に眠れる音を

遠くとおく放ちやれよ

遠くとおくあそばせよ

子供らよ

鐘を撞け

ゆく春の日は真昼

青春の丘の起き伏し

この「春の鐘」の詩には、ドイツの詩人リヒアルト・テールメル原作森嶋外訳の「海の鐘」という詩が重ねられている。鐘の音をきくことのできた「海の鐘」の中の息子こそ、夕爾であり二人の息子に歌をうたてきかせる漁師の父も、また夕爾である。よりよく生きるためにも、いい詩をつくるためにも、鐘の音をきくことができるような心を持っていたい」というのは夕爾の生活の中で日々祈りのように願いつづけられていた。夕爾には、同じ鐘でもこれとはちがった角度からとらえた「鐘の音を追う鐘の音よ春の昼」の句もあり、一年間、尾道の光明寺境内に住んだことのある私には、いきなり春の尾道水道に向って停とどまっている錯覚をいだかせられる句だ。夕爾について言う時、詩でも俳句でも独特なのは、「童話風の世界をとらえ描くことに長じていた」ことではないだろうか。おそらくこの一点では他の追隨をゆるさないとさえ言える。前項でみたが、夕爾は短歌や俳句を「負の遺産」として受けとり、俳句より、近代詩の表現にかけた時期がある。自分は「詩と俳句に徑みち庭がないから」と自省しつつ、夕爾は違和感をもたらず句の高い評価には執拗にこだわらず、やがて抜け出した。俳句を自らのものにしたのだ。児童達の年令では、文学の理解はないのだからとの観点から「児童詩は詩ではない」と考えたのは、夕爾が外部から得た教養であり、常識であった。しかし、その常識がするりと越えられたのは夕爾の「微妙な感覚を触知できる能力」であった。からむ蔓に植物として生命力を見ると同時に物にからみそこねた枯蔓のユーモラスな姿も感知できる目と心、そこに不断にはらわれている感受性のアンテナは、二月の空のヒバリの声ばかりか宇宙からのどんな信号も敏感にとらえるべくふるえている。へしばしの間、空にかかる七色の虹も、へ鱗の目のような赤い月もへ丸い目ではちばちまたたく水たまりも、童話の本の中だけでなくも日常の中にあるものにすぎないのだ。十年以上の時間をかけて夕爾の詩の翻訳と研究に没頭したロバート・エツプの英訳詩集の序文を大岡信は「死後になってこのような訳者に出会えたことは、木下夕爾にとっての大きな幸せであらう。そしてこのような訳者の出現は、木下の詩人としての生き方に照らし合わせてみると、いかにもふさわしい出来事だったと私は思う。」（昭和五十七年三月）と結んでいる。大岡信の夕爾の詩と句についての解説には何度よんでも溜飲がさがる。

実をいえば、私は『折々のうた』という朝日新聞連載で、木下夕爾の句を前後六回ほど取りあげていて、これはその連載で対象とした現代俳人の作品としては、決して少なくはない数なのである。私は、何が木下夕爾の句のよさだと思つてたびたび取りあげているのだろうか。一口で言えば、彼の句は、それがなぜよいかをことさらに説明する必要をほとんど感じさせない。という意味で「よい」のである。つまり彼は、ごく自然に、俳句という形式によつて、俳句という詩を作っている。言いかえれば、俳句以外のものや理論めいた理窟によつて彼の句のよさを説明する必要を、感じさせないのである。

それでいて、彼の句は少しも、単に、わかり易い句なのではない。十分に理も情も通^{かよ}っている。想像力の飛躍もある。要するにいい俳人ならだれでもそうでなければならぬはずの、時代を超えて永持ちする要素をもつた俳人の一人だということである。

「机の下に棲む風」「木下夕爾」

また、大岡信は、前掲の文章で「海の音にひまわり黒き瞳をひらく」をとりあげ、「物いわぬ物体や草花の中に脈うつ命の瞬^{またた}きを発見し、よく刈りこんだ的確な表現で、童話風の世界をとらえ描くことに長じていた。彼の詩にも共通する世界。」とも評して、夕爾の句の「よく刈りこんだ的確な表現」と季語の使い方とを関連させて、

これを別の角度から言えば、夕爾の句は、季語の使い方が常に「的確」なのである。たとえば、「花冷の庖丁、獣脂もて疊る」。

「花冷」は桜の花どきの不意の冷えこみ。そんな日、切った肉の脂でうつつら疊っている庖丁。季語「花冷」の感触に関する模範答案を句そのもので書いたとでもいえそうな、いわゆる極^{きま}まった句」

と評す。大岡信の読みは、これもまた「よく刈りこんだ的確な表現」によつて、夕爾の美質を浮上さす。

古典と現代の作品を往還しながら、他に追隨するもののない読み手である中央の詩人によつて木下夕爾は、「要す

るにこの俳人は、季語をはじめとして、句の中で用いる日本語の「質感」についての一瞬の計量が、きわめて正確にできた」として評価された。年譜によると夕爾が東京（中央）にあって詩人として生きることを断念したのは昭和十三年であるから、この評価は、実に半世紀をこえる時間を要したのだ。

人は、だれにも子どもだった頃があるのに、その頃の自分の心を遠くへ置き忘れている。記憶のカケラはないでもないが、ことばも経験も少ないその頃は、思いをことばで表現できなかった。「あのころ、へこどもである」という意識どころか、へにんげんである」という意識もなかったように思います」と童話作家工藤直子さんはいわれる。「へなにもものでもない」状態で、膨大な出来事に、日々遭遇したのに、なぜこの出来事だけが記憶され残っているのだろうか？」とも。

工藤さんのことばにうながされて、私も心に浮んでいる記憶のカケラをたよりに当時の記憶を再現してみたい。 「へなにもものでもない」状態で味わったものが、こども時代に、たっぷり詰まっていること」を観念重視の時代にはちやく発見した大人が木下夕爾であったこと。これはもう特筆すべきことだ。

この度、山中玄造氏の文章「木下夕爾と学研」が二度にわたって、『備後春秋』（第64号、第65号）に掲載されて、昭和三〇年、木靴発行所刊の『児童詩集』にない詩にふれることができた。学研の学年別の月刊学習雑誌に掲載された夕爾の巻頭児童季節詩と作者のことばが付記されたもので、山中氏は「初めての原稿依頼から四十年経った」と感懐をこめて手元に残っている作品を紹介して下さった。詩はもちろん、添えられた絵も素晴らしく、とくに詩のあとにつけられた「作者のことば」は、詩論を書いていない夕爾の詩論に匹敵すると思われるので以下、資料として記しておく。（山中氏は、昭和二九年春に学研に入社し、「三年の学習」編集係に配属され、旧制中学の先輩で敬愛する詩人、木下夕爾にさっそく原稿を依頼した。夕爾の手紙には、「児童詩を初めて書いたが如何でしょうか。二年作品（へびりのす）と（山家のひる）を送るので、どちらを選ぶかはお任せする。」とあり、へびりのすを「三年の学習」に（山家のひる）は「四年の学習」五月号に載せた。とあるが、以上二作品は『児童詩』に掲載されているので除く）

石がきのカニ

石がきの あなから

カニが のぞいて いる

まだ 足だけだ

出て こい

ヤスを かまえて

もう せんから まって いる

はりがねを とがらせて

にいさんが 作った ヤスだ

ぼくが 竹で 長い えを つけた

出て こい

出て こい

白い 雲の うつる 水の 中で

まだ 足だけが うこいて いる

絵・渡辺三郎

「三年の学習」三七七年七月号

☆

星とむぎのほ

明るい 夕ぐれです

空と同じ色の 青いけむりが

一すじ のぼっています

むぎのくろんぼを やくけむりです

重たいほくびを かしげあいながら

はたけのむぎたちは ささやきました

「むぎになれなかった かわいそうななかま」

「何も わるいことをしなかったのに」

いつまでも 明るい 夕ぐれです

けむりの消えさった空に

星が ひとつずつ 生まれはじめました

その中に いつもは見えない

とくべつに美しい 大きな星があります

重たいほくびを 寄せあいながら

はたけのむぎたち ささやきました

「かわいそうな なかまの星だよ きっと」

「もう あの星に生まれかわったんだね きっと」

おかの 林の上の その星は
はたけのむぎたちに よびかけるように
大きく 美しく またたいていました。

作者のことは―五月、六月のころ、よく道ばたにぬきすてである、黒いむぎのは、あれが、くろんぼです。病氣にかかったほです。ほかのむぎへうつらないように、ぬいて集めてやきます。くろんぼは、ぬきとられるとき、まるで、いやいやをしているように、また、ほかのむぎたちも、不幸ななかまのつれさられるのを、かなしんでいるように、いつも私には思われるのです。

この詩は、そういうむぎばたけのことを、思いうかべながら、やさしく明るい気持をもとにして書きました。

絵・稗田一穂

「五年の学習」三一年六月号

☆

夕やけ雲

きょうも まつかな

夕やけだ

えんがわに こしかけて

足を ぶらんぶらん しながら

(木下夕爾)

とうきびの やけるのを 待っている

むこうの山も

とうきびばたけの上も

まっかな まっかな 夕やけ雲だ

庭にいっぱい ちっている

さるすべりの花より

まだあかい

「夕やけ雲」によせて――まちの夕やけは、すずかけの並木や、公園の森や、家々ののきを、そめていることでしょう。いなかに住んでいる私には、すぐ、とうきびの葉のそよぎ、小さな花をつけた田んぼのいね、朝晩青い色のこくなってくる遠くの山々、――それらの上いっぱい、もえひろがっている夕やけ雲のさまが、頭の中にうかんできます。

夏の終りから、秋のはじめの夕やけは、たとえてみれば、まもなく終りそうな、美しくたのしい、えいがの画面のようです。だんだん、すくなくなっていく夏休みをおしむ気持といっしょに、できていない学習帳や、こん虫採集、植物採集のことなどが、そろそろ、気になります。

こよみでは、八月八日から秋なのですが、まだまだ夏とかわらない。暑い日がつづきます。ただ時おり、だいどころのすみや、畠のへんから、ひんやりした風がふいてきて、あまもなく秋になるんだなあ、と思うことがあります。夕やけ雲の美しいのも、このころです。そんな夕がた、私は、えんがわで、おかあさんのやいてくれる、とうきびを待っています。だれかの詩に、「両手にもってたべるとき、まるでハモニ

かみたいだ」と書いてあった、あのとうきびです。おいしそうなおいが、ながれてきます。早くやけな
いかなあと思って、足をぶらんぶらんさせているのです。

夏休みの、いなかの子どものたのしく、しずかなひとときです。

(木下夕爾)

絵・岩崎ちひろ

「四年の学習」三二年九月 夏休み特別号

☆

谷間のもみじ

もえる火の色の もみじ

赤と黄と みどりの あかるい もみじ

谷間 ぜんたいが

クレパスを ぶちまけたようだ

ひるの月が すんだ空に

ぼんやり うかんでいる

下の谷間の こみちから

かごをせおった女の人が のぼってきた

もみじに そまったような

あかいほおをしている

せなかのかごにも
まっかなもみじのえだが　さしてある

この詩を書いた気もち——この詩は、山へ行つたときの、目で見たまま、心にかんじたままを、書きました。さいしよに谷間全体の、大きく美しいもみじが、目につきました。カエデやハゼは、火のようにまっかですが、そのほかの木のもみじは、赤と黄とうすい緑のまざつた、ふくざつな色をしています。ほんとに、クレパスをいっぱい、ぬつたようです。それから、青く、深く、すんだ空に、ほんやりうかんでいる月は、これもわすれないように書きました。

谷間を見下ろしているとき、わかい女のひとが、登つてきたのです。せなかの、もみじの小えだは、持つて返つて、花びんにでもさすのでしょうか。その中には、山ぶどうのえだも、まじつています。黒い紫色の点がついています。たぶん、小さい妹か弟にやるのでしょうか。

以上が、目で見たものですが、心にかんじたのは、その女のひとの、ほおの色です。もみじのころの、山の空気は、ひんやりしていますが、細い、急な山道を登つてきたので、よけいにほおが、あかいのです。それが私には、もみじにそまつたように、かんじられたのです。

絵・岩崎ちひろ

☆

「四年の学習」三一年十一月

豆まき

フクは　うち！　オニは　そと！

おむかいのうちだ　せっちゃんの声だ
もうひとり　は　だれかな

ほくも　負けないようにやった

フクは　うち！　オニは　そと！

さいしよの声は　板べい　はねかえった

二どめの声は　風　の　つて

とんでいった

おむかいの　かきねから　どつと

わらい声　は　はじけて　出てる

空の星が

ばらりと　豆をまいたようだ

この詩を書いた気持——二月のはじめの節分の豆まきは、あくまをおいはらう行事です。私は子どものとき、「もっと大きな声をださないと、オニがにげてゆかないよ。」と、よく言われたものです。二月の夕方につめたく、空気も、きゅんとひきしまった感じがします。「オニは、そと！」と、大きな声をだしたあとは、ほんとにせいせいいした。心の中のわるいものが、みなおいはらわれた気持です。

(木下夕爾)

絵・市川楨男

「四年の学習」三三年二月号

☆

みどりの矢

草の矢の 打ちっこをしよう
指ではさんで しゅっと打つ

さあこい

ここへ こい

ぼんと むねをたたいて
手をひろげて わらってる

草の矢の 飛ばしくらをしよう
指ではさんで しゅっと打つ

どっちが高い？

どっちが低い？

みどりの矢は 風にのって

高く 高く まっている

この詩を書いたきもち——草矢は、ひりびろとした野原での、たのしいあそびです。たいてい、カヤヤ
ススキの葉をさいて、指にはさんで、しゅっと飛ばします。

夏のはじめの太陽がいっぱい照って、さわやかな風の中に、どの草も、背く長く、そよいでいます。私

のすんでいる所では、みどりの矢の飛んで行く向こうに、てのひらにかくれるくらいな海が見えたりします。

ただし、ちょっと、指に紙でもまいたりして、きずしないように、近くから、顔をねらったりしないようにしましょう。

(木下夕爾)

絵・岩崎ちひろ

「四年の学習」三三年六月号

☆

かぶと虫とハンモック

ハンモックが つつてあつて

だれもない

本が一さつ のせてある

何の本かな

ユラリ ユラリ

本の のつかった ハンモックが

ゆれて いる

ハンモックの下で

マツチばこを くくりつけられた

かぶと虫が

いっしょうけんめい

糸を 引っぱっている
ウントコ ウントコ
まだたくさん 宿題の残っている
ほくら みたいだな

この詩によせて——長い夏休みのうちでも、楽しいのは、臨海、林間学校へ行ったときでしょう。この詩は、林間学校のある日の午後のことを書いたものです。そこでは、カプトムシやカミキリムシなどが、なかのよい友達になります。

またそこでは、いつも明かるい、にぎやかなわらい声が、いっぱいになっていますが、そのあいだに、こんなふうな静かなときもあります。その静かな空気から、明かるい、にぎやかなわらい声のさまを、そうぞうしてみてください。

絵・市川 楨男

☆

「四年の学習」三二年九月号

かすかな ひばり

ひばりが 鳴いている
みんな 学校から帰る
野なかの いっぱい道
話をやめると きこえる

立ちどまると かすかだけれど
はつきり きこえる

ことしの いちばん早い ひばりだ

つめたい風の中

青く すみきった 空の中

ほら 鳴いている 鳴いている

ぼくらの耳の中でも 鳴いている

この詩によせて——ひばりは、ふつうは三月ですが、じっさいには、一月ごろから鳴きはじめます。はれた日のつめたい風の中でも、くもった空の深いところでも、鳴いています。あまり気づかないだけです。広い野原でそれをきいたときの、心のおどろきを、「きこえる」から「鳴いている」というふうには、だんだん強めて行き、また、「ことしのいちばん早いひばり」「耳の中でも鳴いている」というような感じたままのことばで、いいあらわそうと思って書きました。

かすかなひばりの声は「あるもの」や、「できごと」をちゅういぶかくかんさつしたり、耳をすませてきいたりして書く、ぼくらの「詩」にはではないのでしょうか。

(木下夕爾)

絵・渡辺三郎

「四年の学習」三三年二月号

☆

朝のへや

朝 テーブルかけを とりかえる
白いテーブルかけを とりかえる
さっぱりと

きもちも 新しくなる

小鳥が さえずってる

まどわくに松の花ふんがつもってる

きのうの いやなこと 悲しかったこと

みんな テーブルかけの下へ

かくれてしまえ

絵・岩崎ちひろ

「四年の学習」三三年五月号

☆

にじとかたつむり

あかいところだけのこして

消えかけていたにじ

ぐみの葉に

とまっていたかたつむり

はつきりと

おぼえている

しかられて

背戸のはたけに

でていたとき

この詩によせて——いなかでは、家のうら口あたりを「背戸（せど）」といいます。「背戸」は、そんなところですから、表どおりや、へやの中とはちがった、なつかしい思い出があるものです。

しかられて、ひとりで、うらののはたけに出た。ぐみの葉をちぎってはすてる。葉の上に、かたつむりがとまっている。つのに、ちょっとさわると、みじかくひっこめる。なみだがにじんでくる——。

この詩では、しかられたかなしみとなみだを、にじによって……はらだたしさを、ものをいわないかたつむりによって、あらわしました。

（木下夕爾）

絵・岩崎ちひろ

「四年の学習」三三年七月

山中玄造氏は、以上の詩の紹介のあと、手元に残っているこれら以外にも掲載作品があると思うと述べ、次のような文章でしめくくられている。

他に、「アリババと四十人の盗賊」という題の夕爾先生の劇詩が「四年の学習」の口絵ページに載ったのを記憶している。絵ではなく、人形を撮影したカラー写真がバックとなっていた。その頃、夕爾先生は、劇詩に意欲を持っているとおっしゃっていた。このカラー写真の色が濃い目に印刷されて出来たので、「詩が損われる」と、担当編集者の片岡菊江先輩が怒ったものである。

当時の「学習」に掲載する巻頭季節詩は、一流の詩人達に原稿依頼していたから、特定の詩人に対する依頼は、一二年に一度となるのが普通だ。私は、その時々^{かた}に所属していた「学習」(三年、四年、五年の学習)のために夕爾先生に原稿依頼したのだが、今考えると、それは甚だ多い頻度であった。夕爾先生は、それに応えて執筆してくださった。そして自由闊達に、作詩を楽しんでおられるようにさえ感じられる。

先生の児童詩を今改めて読むと、実に平明で、柔かい情感に溢れている。先生の作品の特徴である端正で平易な日本語と、あくまで鋭い感性で紡がれた人間愛が息づいている。

この章 完

〈参考文献〉

- (1) 『含羞の詩人・木下夕爾』福山文化連盟
- (2) 『わが詩・わが旅』木下夕爾エッセイ集 内外印刷出版部
- (3) 樋口 覚『近代日本語表出論』五柳書院
- (4) 鈴木貞美『梶井基次郎表現する魂』新潮社
- (5) 大岡 信『木下夕爾』花神社
- (6) 工藤直子『子どものころにみた空は』童話屋
- (7) 『備後春秋 第64号』・『備後春秋 第65号』備後春秋編集部
- (8) 矢代静一『含羞の人私の太宰治』河出書房新社